

## 川崎からの再エネ 100 宣言！（第 1 部 前編）

出演者（敬称略）

<司会・ファシリテーター>

川崎市国際環境施策参与 末吉 竹二郎

<パネリスト（五十音順）>

川崎信用金庫 お客様サポート部長 中村 浩二

日崎工業株式会社 代表取締役 三瓶 修

富士通株式会社 サステナビリティ推進本部 環境統括部長 濱川 雅之

ナレーション：

本日は RE100 や再エネ 100 宣言 RE Action に参加しておられる日崎工業株式会社・富士通株式会社・川崎信用金庫の市内事業者 3 社にお越しいただき、末吉竹二郎川崎市国際環境施策参与をファシリテーターとして、再生可能エネルギー100%に取り組むきっかけや苦労されたこと、また反響・効果等についてお話しいただきます。

さらに国内外のカーボンニュートラルの潮流、中小企業・大企業・地元金融機関それぞれの取り組みなどを幅広く論じていただき、2050 年脱酸素社会の実現へ向け、市民事業者等の皆様に幅広く行動いただくきっかけとしていただきます。

末吉：みなさんこんにちは。

ご参加いただき誠にありがとうございます。今日は川崎からの再エネ 100 宣言！～企業ができるカーボンニュートラルの取組～についてパネルをいたします。

私はこの 10 年ほど川崎市の国際施策参与として環境問題についてお手伝いをしております末吉と申します。

皆さんご承知だと思いますが、昨年 11 月、川崎市が福田市長の強いリーダーシップのもとで「かわさきカーボンゼロチャレンジ 2050」をスタートさせております。

改めて川崎市の環境問題への取組の歴史を振り返りますと、皆さんご存知の通りですが、60 年代から 70 年代経済成長に伴って公害に大変苦しみました。

しかし皆さんの力でその公害を克服し、私が聞いてびっくりしたのは多摩川の水が、すぐに飲んでもいいくらいに綺麗になっているとか、晴れた日には富士山がよく見えるのだと。そういった具合に非常厳しい公害を乗り越えてきたのが川崎市です。

その川崎市が、新しい地球環境問題のチャレンジとして 2050 年までにカーボンゼロにするというチャレンジを打ち立てております。

これはもちろん川崎市だけではできない話でありまして、実際にそのゼロを実現するためには、市内の様々なステークホルダー、企業の方々、これは金融機関を含めてですが、川崎市の企業の方々の協力・努力がなければ実現できません。

そういったチャレンジに、早くから取り組んで大きな成果をあげておられる3社の方をお招きして、どうすれば川崎市で本当に「再エネ100宣言」が実現できるのか、カーボンニュートラルが実現できるのか、そういった事を議論していきたいと思います。言うまでもなく川崎市は、大きな企業から始まって中小企業、あるいは普通の生活の人々と様々な要素を含んだ、いってみれば国の縮図みたいなものだと思います。ですから川崎市でこれからやっていくことはおそらく日本全体にとっても、アジアにとっても、世界にとっても、良きモデルになれるのではないかと思います。そういったことを念頭に置きながら、今日のパネルを進めてまいりたいと思います。

末吉：では早速、今日ご登壇いただく3社をご紹介します。

まず市内中小企業の代表として日崎工業株式会社です。今日は代表取締役の三瓶さんにお越しいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

三瓶：よろしくお願いいたします。

末吉：それから2番目は、市内の大手企業を代表して富士通株式会社にお越しいただいております。サステナビリティ推進本部環境統括部長の濱川さん、どうぞよろしくお願いいたします。

濱川：よろしくお願いいたします。

末吉：最後になりましたけれども、市内金融機関の代表として非常に長い歴史をお持ちの川崎信用金庫にお越しいただいております。お客さまサポート部長の中村さん、今日はどうぞよろしくお願いいたします。

中村：よろしくお願いいたします。

#### 【第1部 再エネ100%に向けた取組について】

末吉：それでは第1部といたしまして、再生可能エネルギー100%に向けた取組について、3社の皆さんがどういう具体的な取り組みをなさっているのか、その取り組みの内容をお話いただくと同時に、なぜ再エネ100%を目指すようになったのか、あるいは実際に取り組んでみると「こんな苦労があったよ」といったようなお話も含めて、3社の取組の状況をご紹介いただきたいと思います。

それでは先ほどご紹介した順番通り、まずは日崎工業の三瓶さんよろしくお願いいたします。

三瓶：私たちは川崎事業所を構えてもう55年になるのですが、そもそも町工場で、板金加工を中心とした金属製造業なのですが、脱炭素に関してはもともとそんなに無頓着で、

意識はなかったのですが、7年前から本格的に脱炭素活動にも取り組んでおります。意外といろいろなことをやってみたのですが、失敗もあり成功もありということで様々な活動が、実際に数字に表してみると、意外と成果も出てるなというところで今後も脱炭素化に向けて、RE100はどうやったら実現できるかというのをチャレンジし続けているところです。

末吉：ありがとうございます。資料を読みながら思ったのですが、省エネと再エネの二本柱にされているところが、私大変気に入りました。

三瓶：ありがとうございます。

末吉：これは日本全体も世界でもそうなのですが、再エネだけではなかなかゼロは実現できない。使うエネルギー自体を少なくする省エネこそがまず第一にあるべきだという考えがあります。「省エネは第一の燃料である」という言い方もありますよ。そういった取り組みをしたいと思われた、何かきっかけがあったのですか。

三瓶：そうですね。うちの会社は私が2代目としてやっているのですが、両親が実は福島第一原発所ですね、福島県の大熊町と双葉町にまたがっているかと思いますが、その両隣町出身で。

実際に2011年の第一原発の事故以降、様々な故郷に及ぼされた悲劇を見て、そこから私の場合は脱炭素というよりも、スタートが原子力発電の恐ろしさを知ったというところからエネルギー問題に興味を持つようになって、自社をケースに何か良いモデルができないかなというところで、様々なことをチャレンジし始めました。

末吉：ありがとうございます。

多くの中小企業の皆さんに元気づけになるような好事例だと思って読ませていただきました。

それでは続きまして大企業の代表として富士通さんをお願いしたいと思います。

濱川さん、会社のご紹介を含めて、取組についてお話いただければと思います。

濱川：富士通グループでございますがICT分野において、各種サービスを提供すると共に、それを支えます高品質・高性能なプロダクトデバイスの設計・開発、それから製造販売・運用保守までトータルに提供しております。

創業は1935年になりまして、昨年85周年ということで改めまして我々の存在意義、パーパスを策定しました。イノベーションによって社会に信頼をもたらし、世界をより持続可能にしていくということを新たに掲げて、このためにいろいろな活動を進めておるところでございます。

この CO<sub>2</sub> の削減、再生可能エネルギー導入拡大というところも、以前から取り組んできたことではございますが、やっぱりきっかけとなったのは 2015 年のパリ協定であったり、SDGs の採択というところでございます。

我々も長期的なその目標を持って取り組んでいくということをやらないといけないというところで、2017 年に、「富士通中長期環境ビジョン・FUJITSU Climate and Energy Vision」というものを策定しまして、50 年ゼロに向かって進んでいこうと歩みを始めたところでございます。

末吉：ありがとうございます。

さすがに技術とかテクノロジーの世界的大企業でいらっしゃる富士通さんのお取組は非常にかっちりしていると感心し読ませていただきました。

お待たせしました。

川崎市信用金庫の中村さんにお話いただきたいと思います。大正 12 年に始められたということですから、もう 100 年の歴史になるのですね。

中村：そうですね。

末吉：文字通り川崎市とともに成長してこられた。

中村：はい。

末吉：あるいは川崎市の成長の陰で支えてこられたという地域金融機関かと思います。少しお話をいただきます。

中村：川崎信用金庫は政令指定都市であります神奈川県川崎市に本店をおく金融機関でありまして、川崎市内を中心に東京都大田区、横浜市内にまたがり現在 56 店舗で営業を展開しております。ただいまお話にありましたとおり、1923 年の 7 月に設立しまして 2 年後の 2023 年には創業 100 周年を迎えさせていただきます。

その中で、私が在籍する「お客さまサポート部」について、少しご紹介させていただきます。地域の中小企業事業者様の課題を一緒に考え、そしてその課題解決に向けたお手伝いをさせていただく、そういった部署でございます。

例えば販路拡大をするためのお客様とのビジネスマッチング、または後継者問題でお悩みのお客様に対しての事業承継、また M&A のご相談。最近では事業再構築補助金や、その補助金申請のお手伝い等をさせていただいております。

また今回のテーマであります SDGs やカーボンゼロを市内の事業者様に普及啓発活動をさせていただくことも私の在籍する部署で行っているところであります。

末吉：ありがとうございます。

実は私もずっと銀行で働いておりましたので、同じ金融機関の者として思うのですが、もともとはあまり金融機関の人は環境に関心はなかったですよ。きれいなお店で街角の良い所で仕事をしているので、空気を汚したり川を汚したりしてないかな、というところで環境に関心がなかったのですけれども。

今の時代はその金融が扱うお金の流れこそ、結果的に環境を良くするのか悪くするのか、大きな違いを生むというそういう意識が出てきたのだらうと思います。金融機関の場合はお客様との取引があってこそ成り立つビジネスですけれども、こういった問題はお客様とはどういう形でお話しなさるのですか。あまり難しいことを言うと嫌われるのではないかと。

中村：例えば、我々も昨年の10月に川崎市の「カーボンゼロチャレンジ2050」に賛同させていただいて、その後ご案内をいただき「Re Action」、こちらにも手を挙げさせていただいたというような経緯がありまして。

弊金庫としてもそんなに威張れるほど早くから取り組んできた課題でもございませんでした。そんなこともありまして、例えばこちらにありますようなパネル、「カーボンゼロ、かわしんと一緒に始めてみませんか」という非常に馴染みやすいキャッチで、店頭、全営業店のATMコーナー付近にこちらのパネルを置かせていただいております。

あとこれは商品になりますけれども、そのカーボンゼロの取り組みに向けた商品のご案内もさせていただきます。

難しいこと言うと、今お話もありましたとおり敬遠されてしまいますので、いかに市内の事業者さんに「かわしんと一緒にやってみましょうよ、もうやらないといけない時代が来ましたよ」ということで伴走していく、そのようなイメージでやっております。

末吉：そうですね。

金融も「嫌なことを言うのやめとこう」では結局お客様がダメになると同時に金融もダメになるという、運命共同体ですから。ですから、いかに今は耳に痛い話でも、「将来のためには今何をしましょう」とそういう問いかけが非常に大事じゃないかと思っております。

以上